

医療

健康

患者に寄り添う

美奈川 由紀 ▼▼▼ 17

強皮症患者の生活

- 保温を心掛ける
- 食事は腹八分目、たら2時間ほどならない
- 禁煙
- 無理な運動は避ける
- 特殊なスポーツ、扱う趣味などは相談を



黒皮症の根元の甘皮の黒皮症の症状として注意 (佐藤 勉)

瘍をつくり たげも血でやめまじ 「次に合道炎は、胃が大事ですにして刺激ける、食へ

大腸がん末期の尚子さん(仮名)は、四十代と若いため痛みが強く出る。入院中は経口とパッチタイプとの張り薬の医療用麻薬で痛みをコントロールしていたが、自宅に戻ることが希望した。一番の不安は痛みのコントロールを続けられるかという点だった。

尚子さんは認知症の母親と二人暮らしで、家族の援助を受けることは難しい。そんなとき、尚子さんは訪問看護の存在を知り、訪問看護師の派遣を頼んだ。そのほかの身の回りのケアは自分でし

えることができた。在宅には、麻薬を処方する資格を持たず痛み止めを出せない医師がい

たり、「医院での麻薬管理は大変だ」との理由で資格を返上したりする例もあるという。自宅に戻り痛み止めが必要となっても、在宅医が痛み止めを使えなかったというケースも決して少なくない。

病院で、事前に病棟看護師を準備をして、訪問看護師との連携を密にすることで、尚子さんの願いは



がん患者の自宅で看護する訪問看護師

とをためらう人が少なくない。また年齢に関係なく、痛みに不安を抱く患者は、在宅に戻る決心がつかないという。

訪問看護は高齢者対象だったが、一九九四年の法改正により在宅で医療(療養)を受けやすくなる人が利用できるようになった。ただ、医師や看護師などの病院スタッフやケアマネジャー、かかりつけ医などからの情報提供がないと、患者はその制度の存在を知ることができない。

最期を自分らしく生きる

「自宅に戻りたいけど、不安」「痛みは自宅でコントロールできるのだろうか?」そんな不安を持つ人は少なくないだろう。プロの訪問看護師は心強い存在となる。「住み慣れた自宅で生活したい」とは誰もが願う。不安を抱える人は主治医や看護師、ケアマネジャーなどに、訪問看護師について尋ねてほしい。自分らしく生きる選択肢が広がるかも知れない。

「みながわ・ゆき、ジャーナリスト、看護師、福岡市西区」